ベンガラ石（福永さん 所有）

湖北の地名を探る

「丹生」とは赤土の地、

丹生（にう）……地元の人でなければ中々「にう」とは読んでもらえない地名です。
丹生ダムと聞くと、若い人なら「新しい（new）ダムのこと？」と思うかもしれません。丹生を「にう」と読めても、その語源に隠された文化的な意味までご存じの人は地元でも少ないのではないでしょうか。国語学が専門で地名や語源に詳しい滋賀女子短期大学名誉教授の増井金典さんと、伊吹町の郷土史家の福永円澄さんに、湖北の地名についてお話をうかがいました。

●赤い土を意味する丹生（にう）の地名

「丹生」の地名が表している意味は「赤土の地」です。

「丹の字は『タン』『あか』『に』と読み、『丹砂（赤い土）の呈する赤色』を表しています。日本語のアカの音は『明るい』がルーツ。暗（あん）、黒（こく）に対する言葉で、転じて『まごころ』の意味にもなりました。現代語の丹頂はアカ、丹精、丹念はまごころの用法です」（増井さん）

丹（に）を生むところ……ここから丹生の地名が生まれたのです。赤色の土には水銀朱（辰砂）と赤鉄鉱、鉛丹の三つがあります。

「丹生の土には鉄（酸化鉄＝赤鉄鉱）が多く含まれていたのでしょう。赤鉄鉱を七〇〇℃～八〇〇℃で熱するとベンガラになります。この地にベンガラを塗った建物が多いのはその名残だと思います。ちなみに一、三〇〇℃まで熱すると磁鉄鉱になり、鉄の原料で磁石が作れます」（福永さん）

丹には殺菌力があり、木材の防腐剤に適しています。また、呪術のために遺体に塗られたりしたこともあったとされています。

「湖北一帯に鉄が分布、製鉄が盛んだったことは丹生だけでなく、ほかの地名からも推測できますね。『藤川』（伊吹町）もその一つ。藤のツルを用いて製鉄の原材料を運搬したことから、地名に藤が付いています。また藤川の近くには石ではなく鉄で作られた地蔵が今も祭られています。また伊吹町の『寺林』の寺という字は『テーラ』という製鉄を担った人達の名前が地名のもとになっています」（福永さん）

●製鉄は海を越えてやってきた渡来文化

では、かつて湖北が鉄の産地だったことにどんな意味があるのでしょうか。それは「渡来人の拠点だった可能性が高い」ことです。渡来人たちはわが国に製鉄や仏教などを伝え、それに適した地を拠点としたからです。つまり、湖北は文化的先進地だったことを暗示しているのです。

「近江を制するものは日本を制す、という言葉がある。なぜ近江が、それほどまでに大きな軍事的・経済的・技術的な意味をもったのか。この点に関して、京都大学人文科学研究所の所長だった林屋辰三郎は、次のように述べたことがある（『近江人物伝』序）。それは近江が弓なりの列島の中心点に当って、交通上の要衝であるだけでなく、豊かな農業生産力に恵まれ、しかも鉄の数少ない産出地でもあったからである。高い技術を持った渡来人も、まずここに居を定めたし、東西を往来する商人たちの根拠地ともなった」（松本健一さんの著書『地の記憶をあるく　出雲・近江編』より）

また、福永さんは渡来人が湖北の地を拠点とした根拠は鉄以外にもあると言います。

「例えば仏教ですね。奈良に仏教が伝わるよりも前から湖北には仏教が根付いていたと見られるからです。渡来人の文化の一部は大陸→朝鮮半島→敦賀湾と伝わり、湖北へ入ってきたようです。己高山（こだかみやま）にあった寺の遺構が姉川上流の吉槻（よしつき）に移されて残っていますが、この堂の並び方が当時の日本様式ではなく、中国様式がよりストレートに伝わったことを示していると思いますね」（福永さん）

●渡来人文化を運んだ北国街道

湖北が渡来人文化の入り口だったことを暗示するもう一つの地名が「北国街道」です。

「今でこそ北国街道と書きますが、古文書はすべて北国海道。海道の本来の意味は、東海道のように『海のそばの道』ですが、私は海と海をつなぐ道、具体的には敦賀湾と伊勢湾をつなぐ道でもあると見ています。なぜなら、伊勢神宮がある宇治山田も鉄の産地で渡来人文化の地。伊勢神宮の庭には注連縄（しめなわ）を張った大きなべんがら石があります。また、伊勢の近くの山には丸太棒を立てた墓群がありますが、この風習は同じく製鉄が成立したと見られる伊吹町春日にもあるんです。敦賀の海から上陸した渡来人文化はこの道を通って伊勢の海へ伝わった、と」（福永さん）

敦賀湾と伊勢湾の二つの海を結ぶ文化の通り道、それが淡水の海＝淡海の地だったという説です。

この地が文化の通り道になったのは、琵琶湖の水がもたらした恵みによるところが大きいと見られています。それは湖上交通の便が役立ったというよりも、水による豊かな農の実りが多くの人々を養い、この地が古くから人の営みの場となっていたからです。モノも情報（文化）も人から人へ、その営みと共に伝わっていきました。

福永円澄（ふくながえんちょう）
伊吹山文化研究所長。
伊吹町生まれ、小中学校の教諭、校長を経て町史編纂に携わる。

増井金典（ますいかねのり）
滋賀女子短期大学名誉教授。
滋賀県生まれ、国語学会・日本ペンクラブ会員。「が」と「は」についての研究が専門。
『日本語の散策』『滋賀県地名姓氏語源辞典』など著書等多数

水に関係する地名の由来

海老越（えびこし・高月町）
琵琶湖の水位が上がると、「海老」が山の一番低い所を「越えて」来るという事が地名の由来と言われています。

落川（おちかわ・高月町）
高時川に架かる橋が何度も「落ちた（流された）」事が地名の由来と言われています。

夷（えびす・浅井町）
川が氾濫した時、川の淵に溜まった流木の中から木造の「恵比須さん」が見つかった事が地名の由来と言われています。

馬渡（もうたり・湖北町）
足利高氏（尊氏）が北国に向かう時、農民が洪水の中で「馬」の「渡河」を助けた事が地名の由来と言われています。